



県内外から1,000人が参加

の場で議論するのは、おかしい。という質問も出ています。ポーン・その意見には、アメリカは賛成できません。貿易はあくまでも貿易です。そのものが地面にはえるものであろうが、工場の中で作られるものであろうが、あくまでもできあがった商品なり製品は、同じように扱い、市場を開放する努力をすべきだという考えです。

勝部・韓国では、自由化されていない品目はどれくらいありますか。

玄・四百品目あります。その中には、米も牛肉も豚肉もほとんどのくだものも入っています。来年からバナナが自由化になる

どうなる？

21世紀の日本の農業

ので、日本との差は約三十年あります。日本は一九六〇年代にバナナを自由化したのだから、

米は日本ががんばって、韓国の方に飛び火しないようにしてほしいと思います。

勝部・二十一世紀に日本の農業が生き残るための条件とは、なんでしょうか。

ポーン・今、日本が直面している問題は、カリフォルニアのくだもの生産者が直面している国際競争上の問題に似ていると思います。カリフォルニアでくだものを生産するためにかかるコストは、メキシコや中南米諸国に比べ、かなり高いのです。だから、価格ではない部分、品質や味、ブランドなどで競争力を高めてきました。日本の米生産者もカリフォルニアのくだもの生産者がどういうことをしてきたのかを見て、適応できる部分を導入すれば、少しは役立つかもしれません。

藤原・今ある農地を有効的に、しかも生産性の高い作物を導入することが、農業を所得向上に結びつける最大の課題です。

現状のままで、二十

一世紀には日本の農業はなくなってしまうのではないのでしょうか。

石倉・環境保全と農業という関係に発想を転換していく農業の理念、哲学をもつ必要があると思います。

竹井・農業が産業として成り立つて、若い人が胸を張って農業経営ができるようになってほしいです。そのためには、経営の合理化や多角経営、技術改革、自給調整というものが大切になっていくのではないのでしょうか。

勝部・最後に今日のシンポジウムの印象を一言お願いします。

ポーン・今日の日本の農業が直面している問題を直接肌で感じることができたと思います。これからアメリカ人に対して、日米間の米取引引きの可能性を今までより正確な形で説明し、討論することができると思います。

玄・日本も韓国もECも家族農業です。ウルグアイ・ラウンドで何を議論しても、家族農業は絶対守るべきです。

石倉・消費者と生産者のパイプを太くすること、すなわち相手



藤原氏

の話をよく聞いて語りかけていく姿勢が大切なのです。国民的合意を目指して、日本の農業の将来像を確立していきたいと思っています。

竹井・産直は農産物を買うのではなく、生産者の哲学を買うのだと消費者に訴えてきましたが、そのことが間違っていないというのを確信できました。

藤原・後継者の育成も一つの仕事だと思っが、農産物をますます発展させていきたいと思っています。

勝部・ツウエーズ・コミュニケーションというのは、生産者と消費者それぞれが知り知られるということだけでなく、日本と外国との間でも当然行われなければならない。いつか、できれば大館にカリフォルニアと韓国の米生産者を呼んで、ライバルとしてではなく、米づくりのパートナーとして、話し合っがほしいという感じがします。

